ハンムラビ占領下の「ラルサ地域」における
保有地の「管理」と「経営」⁽¹⁾

The “Administration” and “Management” of
Holdings in the Larsa Area under the Occupation of
Ḫammu-rabi

中山 八 歩^{*}
NAKAYAMA Yatsuho

ABSTRACT This paper is to outline the management system of holdings in the Larsa Area immediately after the conquest by the First Dynasty of Babylon, through the consideration of the process of redistribution of holdings.

Ḫammu-rabi conquered Larsa Dynasty in his 30th year. He and Lu-Ninurta, a high official, managed new royal estates through officials (Sin-iddinam, Šamaš-ḫāzir, etc.) delegated to the Larsa Area. These circumstances are roughly reconstructed through the administrative letters excavated from Larsa. Fields directly managed by Larsa Dynasty were confiscated, and holdings palace or temple had granted to subordinates were redistributed through land survey and change of holders.

In Larsa Dynasty, holdings had been inherited among paternal family without renewing registers. The holder was not always the same in registers.

Ḫammu-rabi changed this old management system of holdings. The new system can be roughly divided into two levels. While the first level means holdings were reconfirmed and the management was provisionally kept, the second means holdings were finally granted. The present author proposes that the former as “administration” can be distinguished from the latter as “management”.

First, officials clarified the holder of inherited holding (**eqel bīt abim*) to solve the land managerial inconsistency. If new receivers of holding had been subjects of Larsa Dynasty, officials reconfirmed (*bārum*) the inherited

* 本学会会員

Member of the Society for Near Eastern Studies in Japan

field as *eqel šibtim* “holding field”, and let them temporarily continue their production activities (“administration”). Then, to not only former holders but also immigrants and those who had had no field, officials granted (*nadānum*, *kānum*) field as **eqlum ša ilkim* “*ilkum*-service field” that the holder should be the *ilkum*-service performer (“management”). Similarly, *eqel šukūsim* “subsistence field” was granted, but it will be defined as a type of holding different from **eqlum ša ilkim* (cf. the list in p. 17).

Thus, as the Laws of Hammu-rabi and the administrative letters show, a new management system was founded on **eqlum ša ilkim*.

はじめに

バビロン第一王朝第6代王ハンムラビ（在位 前1792-50年）は、リム・シン（在位 前1822-1763年）が治めるラルサ王朝を治世30年に滅ぼした。ハンムラビは、これによりウル第三王朝期以来、約250年ぶりにバビロニアの統一を成し遂げた。征服後ハンムラビ自身はおそらく旧ラルサ支配地域（以下、「ラルサ地域」⁽²⁾）に長くは滞在せず、占領地経営のためのラルサ常駐の行政官僚団を派遣し、直轄統治した。現存する約200通余りのラルサ書簡は、ハンムラビや、その側近ル・ニヌルタから「ラルサ地域」常駐の官僚に宛てた指令書であるが、ハンムラビがラルサを征服してから死に至る十年余りの占領地経営のあり方を示唆する。「ラルサ地域」全体の最高行政責任者と考えられているシン・イッディナムや接収した王領地経営の責任者シャマシュ・ハーシル配下の官僚団は、これら書簡の指令に従ってハンムラビ自身の意向に沿い、王領地経営を行なった。

ラルサの征服に伴い、旧政権の直営地は接収され、またラルサ王宮や神殿から官吏達に貸与されていた伝来の保有地（*a.šà šuku*「扶養地」）も検地、名義変更などの手続きを経て、暫時新体制下の保有地へと転換が図られた。ハンムラビが「イルクム」義務を伴う耕地（**eqlum ša ilkim*）⁽³⁾（保有地）を王領地経営体制の根幹に据えようとしたことはラルサ書簡やハンムラビ「法典」の26-41条にうかがえる。ラルサ書簡に旧政権下の保有地が度々言及される理由も、最終的にこの **eqlum ša ilkim* へと転換させる意図がその背景にあったと考えられる。

古バビロニア時代の「イルクム」義務と、王領地経営の実態との相関性を巡り、ハンムラビ「法典」やラルサ書簡に基づいたハンムラビ体制下の「ラルサ

地域」の王領地経営に関する研究がこれまでに数多くなされてきたが、いずれの研究にも満足のいかない点がある⁽⁴⁾。概して、既述資料等に検出され、かつ耕地の種別を示すと考えられる全ての用語を網羅しておらず、資料的にも時代・地域ともに異なる資料が合わせて考察対象とされたことに問題点が指摘できよう。

本稿ではハンムラビ体制下の「ラルサ地域」の王領地経営に対象をあくまで限定することで、従来の資料分析上の問題の一端を解消するとともに、その経営の根幹に位置する保有地再分配の過程における諸段階前後を区別して再考察する。

「ラルサ地域」の王領地経営は、その管理レベルの違いから大きく2段階に分けられると推定される。すなわち、①正式な保有地として給付・認可される以前の過渡的な段階と、その後②受給者（任官者）に対し、最終的に保有地として給付・認可する段階である。以下、仮登録と過渡的な経営の段階を「管理」、最終的に保有地として本経営が開始される段階を「経営」と呼んで区別し、従来の研究には欠如していた整合性を伴う経営実態のモデルを提示してみたい。

I. ハンムラビ占領期前の王領地経営

ハンムラビ占領期前の王領地経営のあり方について振り返ってみると、「ラルサ地域」に限らず、保有地（a. ša šuku）自体は初期王朝時代から存在した。ただし初期王朝時代の王領地経営において保有地はあくまで副次的なものであり、直営地経営が主流であった。前田徹の初期王朝時代の都市国家ラガシュの農政研究によれば、保有地は直営地の収穫労働などの奉仕義務に対する反対給付としての性格を持っていた⁽⁵⁾。ウル第三王朝時代には、前川和也によるラガシュ市の研究によれば、王領地全体に占める直営地の比率が過半数を占め、保有地は1/3にも満たず、変わらず副次的なものであった⁽⁶⁾。むしろ直営地経営が整備され、直営地耕作チームが直営地と保有地とをあわせて一緒に耕作していた可能性が指摘されており⁽⁷⁾、保有地経営が王領地経営の主流となっていたとは考えられない。

しかし、詳しい経緯は不明ではあるが、王領地経営の主流であった直営地経営がウル第三王朝滅亡後に機能しなくなり、ラルサ王朝下には、保有地を主流

とした王領地経営へと移行したことがファン・デ・ミアロープによるウルの研究で指摘されている。⁽⁸⁾これは土地の私有や民間経済活動が活性化する前2千年紀初頭の实情にもかなった見方であろう。ハンムラビの王領地経営は旧政権の保有地を中核とした経営実態の掌握から始まり、その後の改革へと移行したのである。旧政権下の保有地体制の詳細は分からないが、後述するように保有地は官職同様に世襲化していたものと考えられる。

保有地体制改革はさておいても、ハンムラビが「ラルサ地域」支配を重視していたことは間接的証拠ではあるが年名にうかがえる。治世33年の年名「ハンムラビ王は『ハンムラビは人民の豊かさであり、アヌ神とエンリル神の寵愛を受けるものである』運河を浚渫し、豊かで絶えることのない水流をニップル、エリドゥ、ウル、ラルサ、ウルクそしてイシンに供給し、離散したシュメールとアッカド（の人民）を統一し…の年」⁽⁹⁾は、占領後「ラルサ地域」の再建と支配強化が図られたことを示すが、ラルサ書簡との関連で考えると、ハンムラビは占領後に旧政権の官吏を解雇するのではなく、再雇用を行なうとともに再び保有地契約を結び直すという具体的な政策が、この年名の後半部分の意味の一端を担っていたとも考えられる。ハンムラビは旧政権の雇用関係や保有地体制を見直して、暫時「イルクム」義務を伴う再雇用を行ない、「イルクム」義務の見返りとしての合理的な保有地（**eqlum ša ilkim*）体制へと転換したと見てほぼ間違いない。

II. ラルサ王朝下の王領地経営と耕地の保有形態

ラルサ書簡にあらわれるラルサ王朝末期の王領地経営・管理のあり方を、これまでの研究を前提として再確認しておきたい。前3千年紀の初期王朝時代からラルサ王朝期にかけての保有地は全て *a.šà šuku* と呼称されていた。しかし、ハンムラビによるラルサ占領後はこの *a.šà šuku* も接収の対象であったことがラルサ書簡に明示されている（AbB 4 69）。また、この接収された保有地には、旧政権下で官吏一族により世襲化されてしまった保有地 *eqel bit abim*（直訳は「父の家の耕地」、英語で言う *prebend*）が数多く含まれていたことがラルサ書簡に確認できる。⁽¹⁰⁾すでにエリスが指摘したが、⁽¹¹⁾幾度となく言及される *eqel bit abim* が旧政権下の保有地 *a.šà šuku* と同義で使われていることは、AbB 4 118 に検証できる。

(資料1)

ラザマ人、ツィリ・アムルムの息子であるギミルムが私(ル・ニヌルタ)に以下のように告訴してきた。彼は次のように(言った)。「幼い頃に彼らは私をバビロンに連れてきました。バビロンで私は王宮の下僕でした。王宮で彼らは私を羊のカパッルム牧夫に決めました。メフルム地区には、私の『父の家の耕地』(*eqel bīt abim*)があります。ニダバ神殿の古い書類(登記簿)に、私は以下のように見ました。『レードゥーム兵士のアダラルム、耕地4ブル。レードゥーム兵士のワルドゥム、耕地4ブル。(この二つの耕地は)メフルム(地区)とムハッタ地区のアルバナ耕区(にある)』。イルクムの古い書類(登記簿)(*tuppi labirim ša ilkātim*)にこのように記載されています。」彼はこのように告訴してきた。さて、(これを踏まえて)私は(以前)汝(シャマシュ・ハージル)に彼を送った。彼らの家と彼らの家の耕地を知るかつての紳士達(長老)を汝のもとへ彼に連れて来させなさい！そして(聖なる)都市神の武器(のもと)で(宣誓させて)、都市の長老とかつての紳士達(長老)が(この件の裁決を)担当し、認承するように(*libirru*)！アダラルムとワルドゥムについて、どちらが彼の「父(祖)」なのか、彼らのどちらの耕地が彼の「父の家の耕地」(*eqel bīt abim*)なのか、さあ都市神の(聖なる)武器のもとで(宣誓させて)認承しなさい(*birram*)！その最終報告をこちらに送りなさい！彼に関する報告の返答を私(ル・ニヌルタ)が送りましょう！(AbB 4 118:5-33:ル・ニヌルタからシャマシュ・ハージル宛の書簡)

牧夫として新政権に雇用されたギミルムは、彼の奉仕の対価として父祖伝来の耕地、すなわちラルサ近郊のメフルム地区の *eqel bīt abim* を要求した。ハンムラビの側近ル・ニヌルタはギミルムの要求を確かめるために、ニダバ神殿の「イルクムの古い書類」(登記簿)(*tuppi labirim ša ilkātim*)を確認したうえで、再登記するようにシャマシュ・ハージルと都市の長老達に命令した。これがおおその大意である。

ここで注目すべきは、「イルクムの古い書類」(登記簿)に記載されているギミルムの「父」の名前が書簡冒頭に記されているツィリ・アムルムではないことである。ギミルムは実の父親の名前が「イルクムの古い書類」(登記簿)に記載されていないと、その登記簿に記載されているアダラルムもしくはワルド

ウムの直系親族であるからこそ、ギミルムの「父の家の耕地」(*eqel bit abim*)はその保有を主張できる耕地であったと考えられる。直系の先祖と見られるアダラルムもしくはワルドゥムの耕地が登記されたのはかなり古い時代であろう。少なくともギミルムの父ツィリ・アムルムの名前が登記簿に記載されていなかったのは、祖父以前に登記された耕地とその権利が代替りの度に登記を更新する形式を踏まず、かつ保有者達に王宮や神殿がそれを要求せず、慣習的に世襲されてきたからであると考えられる。ラルサ王朝下では代替わり毎に登記簿を更新しなくても登記簿管理の規則に抵触しなかったのであろう。しかし、ハンムラビ体制下では管理上問題があると考えられ、現保有者をはっきりさせようとしたのである。

(資料1)はハンムラビ体制下で送られたものであるから、問題となる「イルクムの古い書類」(登記簿)が作成されたのはハンムラビ占領後ではなく、ラルサ王朝の統治時代でなければならない。また *eqel bit abim* は「イルクムの古い書類」(登記簿)に記載されているので、この「イルクムの古い書類」とはラルサ王朝下で給付された保有地の登記簿である。なお、ラルサ王朝下にイルクムという名称が存在したことは今までのところ確認されていない。⁽¹²⁾ラルサ王朝から給付された保有地が記載された登記簿を「イルクムの古い書類」と呼ぶが、新政権の視点から便宜上イルクムという名称を用いたと解釈するのが妥当と考える。ギミルムの *eqel bit abim* がある種の a.šà šuku を指すことは明らかであろう。

「ラルサ地域」行政のナンバー2であるシャマシュ・ハージルは新たに給付・認可される「ラルサ地域」の保有地の登記簿を作成・管理した(後述;資料3)。他方、その前提として旧政権下の保有地の登記簿の所在を掌握し、そして管理したのである。⁽¹³⁾*eqel bit abim* はいわゆる(村落共同体内の)私有地という指摘もあるが、旧政権下で世襲化してしまった a.šà šuku を、ラルサ書簡では *eqel bit abim* と呼んでいたと解すべきであらう。*eqel bit abim* を、世襲された a.šà šuku タイプの保有地と解釈しても *eqel bit abim* の他の資料と齟齬はないからである。旧政権下の *eqel bit abim* 化した旧 a.šà šuku の保有の優先的追認を任官者が求めた場合、その保有がそのまま認められることもあれば (AbB 4 33; 4 69)、代替地が給付される場合 (AbB 4 51; 54) もあった。ここにハンムラビ体制下の王領地再編成の一端として、保有地の割替えが行われたことがあらわれている。

このように、ラルサ王朝下に使われる耕地の種別を示す用語として *a.ša šuku*, *eqel bīt abim* が検出できるが、ラルサ書簡から見て同種の耕地の言い替えに過ぎない。新政権の見方から、単に旧保有地を安堵するのではなく、父祖伝来の耕地として役職とともに継承・相続される耕地として *eqel bīt abim* が使われただけである。そして *eqel bīt abim* はその「父の家」(*bīt abim*) という言葉が示すように個人ではなく、いわゆる父系家族の家産内で相続の形で受け継がれてきた *a.ša šuku* であったと考える。

III. ハンムラビ体制下の保有地の「管理」

王領地再編成にあたって旧政権下の保有地 (*a.ša šuku*, *eqel bīt abim*) 保有者が新政権において、新たに **eqlum ša ilkim* の給付を受けるためには、受給者が旧政権の官吏である場合、まずは旧政権下で受給・相続してきた耕地を、シャマシュ・ハーシルとその組織によって確かに保有地であると追認してもらう必要があった。もちろん前章で見てきたようにどの耕地が給付されるのかについて受給者自身の裁量権はないが、少なくとも「ラルサ地域」に旧保有地があった場合にはその耕地を引き続き保有する希望を願い出ることができたわけである。ハンムラビヤル・ニヌルタの命令で、シャマシュ・ハーシルが **eqlum ša ilkim* として改めて給付するにあたり、まず旧保有地を *eqel šbtim* 「保留地」として追認したことが AbB 4 40 で検証できる。

(資料2)

⁽¹⁵⁾
lú gešpú 職 (以下G職) のイッピ・アダドが以下のように告訴してきた。彼は次のように (言った)。「我々が昔から保有してきた我が『父の家の耕地』(*eqel bīt abim*) (の帰属) を巡って、アビヤトゥムの息子であり ⁽¹⁶⁾ *gištūg. pi.lal* 職 (以下T職) であるシェーブ・シンが私を告訴し、シャマシュ・ハーシル、市 (当局)、長老達が (その件を) 担当しました。彼らはその耕地の帰属について、次のように裁定を下しました。(すなわち、かの) T職の父であるアビヤトゥムがその耕地を保有していなかったこととその耕地が我々の『保留地』(*šibtum*) であることを認承し (*ubirrūnim*)、私に証書を与えてくれました。そのうえ彼らが私に与えてくれた証書に、T職の父であるアビヤトゥムが証人として記載されました。ところが [...], アビヤトゥムの息子が私の耕地 (の帰属) を巡って (再び) 告訴したのです。その

うえ彼は私の大麦を（不当に）保管しています。」このように彼は告訴してきたのである。もしG職のイッビ・アダドが説明したように、シャマシュ・ハーシル、市、長老がその耕地（の帰属）について裁定を下し、イッビ・アダドに耕地（の帰属）を認承し（*ubirra*），さらに証書にT職の父であるアビヤトゥムが証人として記載されているのなら、耕地と大麦をイッビ・アダドへ返還させなさい！しかしその耕地の帰属について、裁定を下さず、またシャマシュ・ハーシルがその耕地（の帰属）を認承せず（*la ubirma*），イッビ・アダドに給付されていないのならば、神の武器を耕地に降ろすように！汝達、市、長老がその耕地の（帰属）問題を神の前で認承し（*liridma*），その耕地を永遠に（？）給付しなさい（*idnā*）！（AbB 4 40: 5-36: ハンムラビからシャマシュ・ハーシル、マルドゥク・ナーツィル宛の書簡）

イッビ・アダドがハンムラビに訴えたところによれば、彼が「昔から」（*īštu ūmī mādūtīm*），すなわち旧政権より保有してきた *eqel bīt abim* の帰属を巡って、彼とシェーブ・シンの間で裁判が行なわれた。シャマシュ・ハーシル、市、長老の三者がこの裁判を担当し、この *eqel bīt abim* をイッビ・アダドの耕地（*šibtum* = *eqel šibtīm*）⁽¹⁷⁾と追認した。この場合の市（当局）と長老は、具体的な地名は不明であるがイッビ・アダドの所属する現地当局を指し、保有地の登記を管理していたため、その立会いが必要とされたのであろう。また、彼らの参画は旧政権下での地方行政がそのまま継承されていたことを示唆しよう。ところが、シャマシュ・ハーシル、市、長老が *eqel bīt abim* をイッビ・アダドの耕地 *eqel šibtīm* として追認したにもかかわらず、シェーブ・シンは再び裁判を起こしたうえ、イッビ・アダドの *eqel bīt abim* から収穫した大麦を不当に保管してイッビ・アダドに渡さなかった。以上に対しハンムラビは、イッビ・アダドの告訴通りなら耕地と大麦をイッビ・アダドに返還させ、ただしもしイッビ・アダドの *eqel bīt abim* の追認も給付も済んでいないのなら、当事者双方に宣誓させたとのち、⁽¹⁸⁾当局がそれを追認後に給付するようにハンムラビが命令した。

注目点は、イッビ・アダドの *eqel bīt abim* が彼の *šibtum* (= *eqel šibtīm*) であるとシャマシュ・ハーシル、市、長老が追認することにあると思われる。イッビ・アダドとシェーブ・シンの争いはハンムラビによる新政権下の保有地に関わる問題であるが、新たに保有地を給付するために、シャマシュ・ハーシルとともに、旧体制に属する在地の権威（少なくとも長老）がイッビ・アダドの

eqel bit abim であったことを追認したのである。シャマシュ・ハージルと在地の権威はイッピ・アグドが旧政権下の *eqel bit abim* の所有者であったことを認めただうえで、その耕地を新体制での *eqel šibtim* として追認したのである。旧政権下の保有地が、新体制下で *eqel šibtim* の名目で管理・維持されていたことは、職能の一つとしてハンムラビのもとで「ラルサ地域」の登記原簿を管理する側近ル・ニヌルタが、保有地を同じく *šibtum* (= *eqel šibtim*) と呼称することからも裏付けられる (AbB 8 3)⁽¹⁹⁾。旧政権下の保有地の実情を掌握するための資料である登記簿はハンムラビの王宮と、「ラルサ地域」王領地経営官僚のもとで二重に管理されていたのであろう。

このように、シャマシュ・ハージルやル・ニヌルタは新体制下で再雇用された官吏の旧政権下の保有地を、当面は旧来の保有家族に安堵する形でまずは *eqel šibtim* 「保留地」として追認したのである。そして、後章の(資料7)、(資料8)で確認できるように、*eqel šibtim* は新体制下の **eqlum ša ilkim* の名目で改めて給付・認可される場合、耕地面積が減らされることもあった(資料7)。つまり、*eqel šibtim* はまだ保有の存続とともに、最終的に **eqlum ša ilkim* として給付するまで過渡的にその経営を追認した仮段階に過ぎない。*eqel šibtim* は **eqlum ša ilkim* として保有地を改めて給付するために管理上、仮保有を認めた耕地の種別を示す用語と解釈することができる。保有地管理体制全体の観点から見た場合、後述する保有地の「経営」上の種別を示す用語 **eqlum ša ilkim*, *eqel šukūsim* と区別して、*eqel šibtim* は仮保有を認めて過渡的に経営が行なわれた「管理」上の種別を示す用語と理解しておく必要があろう。

IV. ハンムラビ体制下の保有地の「経営」

シャマシュ・ハージルとその組織は、旧政権下の保有地を新体制下での *eqel šibtim* としてまずは追認するばかりでなく、ハンムラビ「法典」26-41条でその性格を規定される **eqlum ša ilkim* 形態の保有地に随時移行させた。彼らが旧政権の保有地体制をそのまま踏襲するのではなく、保有地を新たに **eqlum ša ilkim* として給付し直し、その登記簿を作成・管理することを最終的な業務目標としていたことは、例えば AbB 4 22 に検証できる。

(資料3)

この私の手紙を読んだら、汝が管理しているイルクム(耕地)の全書類(登

記簿) (*tuppātim ša ilkim mala talliku*), (すなわち) 汝達が (これまでに) 給付・認可してきた (*taddinā u tukinnā*), 「ビルトゥム義務付きの耕地 (*eqel biltim*), 王宮の下級官吏の耕地, 弓兵と (の) 伝令達の耕地, 牧夫とカパッルム牧夫の耕地, 職人達の耕地, その他の職種の (以上全ての) 耕地」に関する書類, (そして?) 3年間汝達が管理し (*tattallakā*), 彼らが汝達に書き送って新規の王宮耕地に関して, 汝達が任され管理してきた (*tallikānim*) (書類), (すなわち) カール・ナビウムから汝達の (その) 報告を汝達がこちらに送ったがマシュカン・シャーピルに汝達が保管していた, 「新しいイルクム (耕地) の登記済みの書類 (登記簿)」 (*dub mu.da.sā. e u igi.du₈ ša ilkim eššim*) を取ってきなさい! さらに, 汝達と共にイルクム (耕地) の登記に関係したアビ・アシュリム職とシャタンム職達を汝達と共にこちらに届けるために, シッパルの私のもとに来なさい! (AbB 4 22: 3-28: ハンムラビからシャマシュ・ハージル宛の書簡)

この書簡でハンムラビはシッパルにいる彼自身のもとへ, シャマシュ・ハージルと検地官あるいは登記の実務職として働く, アビ・アシュリム職とシャタンム職に「イルクムの書類」(登記簿) を持参させるべく命令する。

「ハンムラビ」法典ではイルクム義務を伴う耕地を **eqlum ša ilkim* と呼ぶが, この用語は実際のラルサ書簡では確認されない。しかしながら, (資料3) で言及される全ての耕地は文脈から判断してまさに **eqlum ša ilkim* に含まれる。シャマシュ・ハージルが経営している (*ilkam alākum*)⁽²⁰⁾ **eqlum ša ilkim* の登記簿 (「イルクムの書類」) では, この種の保有地が「ビルトゥム義務付きの耕地 (*eqel biltim*), 王宮の下級官吏の耕地, 弓兵と (の) 伝令達の耕地, 牧夫とカパッルム牧夫の耕地, 職人達の耕地, その他の職種の耕地」というように具体的な名称で記されており, *eqel biltim* を除けば全て多様な職種の人々に給付・認可された **eqlum ša ilkim* と理解できよう。⁽²¹⁾ シャマシュ・ハージルとその組織は新たに作成される「イルクムの書類」を逐一ハンムラビのもとへ送付するのではなく, 一定期間保管したものを, この書簡の如き命令があった場合にまとめて移管した。「イルクムの書類」(登記簿) を作成するにあたって, 「ビルトゥム義務付きの耕地 (*eqel biltim*), …, その他の職種の耕地」というより詳細な区分 (分類) が耕地管理上存在し, それゆえに概括的な表現である **eqlum ša ilkim* は使用されなかったのであろう。いずれにせよ, それらの耕地を給付・

認可し (*nadānum, kānum*), 「ラルサ地域」の **eqlum ša ilkim* を登記・管理することが、シャマシュ・ハージルとその組織の本来の権能であった。

新体制下の **eqlum ša ilkim* は旧政権下の保有地 (*a.šà šuku, eqel bit abim*) と異なる点がある。(資料2)が示すように、旧政権下の保有地は長年、父系家族内で代替わり毎の審査を経ずして継承・相続されていたようにみえる。当然耕地に付随する義務も自動的に父子間(兄弟間)で相続された。しかし新政権では *eqel bit abim* をもはや旧来の形で保有していくことが認められなかったことが AbB 4 64 で検証できる。

(資料4)

ムトゥム・イルムの息子であるピルフムが以下のように告訴してきた。彼は次のように(言った)。「私の父の家 (*bit abim*) において、急使における1つの義務と、牛引きにおける1つの義務を我々は果たしています。しかし我々の父の家の耕地 (*eqel bit abim*) は牛引きだけに割り当てられたのです。」それらはひとまとまりに受け渡されてしまったのか? 裁定を下さない! もし彼らの父の家 (*bit abim*) で、2つの義務を負っているのなら、(彼らの耕地を義務に合わせて) 半分ずつ分け (て登記せ) よ! 彼が王宮に不平を訴えないように! (AbB 4 64 : 5-19 : ル・ニヌルタからシャマシュ・ハージル宛の書簡)

ピルフムは父系家族(彼の兄弟)とともに旧政権からの保有地 *eqel bit abim* を共同保有している。新体制下で彼の「父の家」はその保有の見返りとして2つの義務を果たすことになったが、本来は1つの義務を負っていた。しかし、問題となるピルフムの訴えに対し、「父の家」で負担すべき2つの義務は結局1つに減らされなかった。むしろ、*eqel bit abim* が2つの義務に対応させて分割されることなく、「ひとまとまりに受け渡されて」(*ibašši ašar ištēnma gummurū*) いることが問題とされた。シャマシュ・ハージルは個々の義務に対応するように、ピルフムと彼の兄弟が保有する *eqel bit abim* を登記上、2つの単位耕地として管理することが命令された。つまり、*eqel bit abim* を旧来の形で保有することは認められず、単位となる耕地ユニットはそれぞれの義務を「1対1」対応にして新たに給付されるのである。さらにハンムラビ「法典」26-41条の規定(特に26, 36条)を考慮すれば、**eqlum ša ilkim* は「イルクム」義務者と **eqlum*⁽²²⁾ *ša ilkim* 保有者が一本化されて登記される保有地であったと考えられる。

ラルサ書簡には保有地として別に a.šā šuku という古来のシュメール語名称が言及されることはすでに述べた。⁽²³⁾ その出典例を追うと、まずは旧政権の保有地が **eqlum ša ilkim* だけでなく、ある種別の a.šā šuku (= *eqel šukūsim*) として給付されたことが少なくとも、AbB 4 4 で検証できる。

(資料 5)

伝令のムナウィルムにディーマト・イリー・アシュランニの「父の家の耕地」(*eqel bit abim*) から耕地 3 ブルを彼の a.šā šuku として給付しなさい (*idiššum*) ! (AbB 4 4 : 4-9 : ハンムラビからシャマシュ・ハージル宛の書簡)

この書簡では伝令職のムナウィルムに対し、第三者のディーマト・イリー・アシュランニ保有の *eqel bit abim* から耕地 3 ブルを a.šā šuku として給付するようにハンムラビが命令していると理解できる。

eqel bit abim が *eqel šibtim* と表記されていないのは、いわゆる接收地であって、もはや過渡的に認められていた耕地の保有はこの時点で停止していたとも考えられる。いずれにせよ新体制下でも **eqlum ša ilkim* としてではなく a.šā šuku タイプの保有地として給付する事例が存在するのである。ラルサ書簡ではハンムラビ占領以前も以後も同じく a.šā šuku なる保有体制が存続しているが、ここでいう a.šā šuku (以下 *eqel šukūsim*) は明らかに旧政権下のものとは異なる⁽²⁴⁾と考えられる。

旧政権の保有地体制を転換して、**eqlum ša ilkim* や *eqel šukūsim* は新体制下でシャマシュ・ハージルとその組織が給付・認可した保有地であり、この際、旧政権下の保有地 (a.šā šuku, *eqel bit abim*) の保有を追認して一時的にその処分が保留された *eqel šibtim* とは、管理上区別して考える必要があろう。そして「イルクム」義務者と **eqlum ša ilkim* 保有者の一本化により、シャマシュ・ハージルとその組織は **eqlum ša ilkim* の経営に処分権や経営権を行使して介入し、王領地経営は **eqlum ša ilkim* を根幹にした体制へと移行したのである。⁽²⁵⁾ また、任官者へ旧政権期からの耕地の保有を追認するばかりでなく、部族軍団長たるウグラマルトゥなどの新規移入者や、従来耕地を保有していなかったさまざまな職種の人々にも **eqlum ša ilkim*, *eqel šukūsim* が給付された。⁽²⁶⁾ 新体制下で保有地が **eqlum ša ilkim*, *eqel šukūsim* として最終的に給付・認可されて本経営が始まる段階を「経営」として、**eqlum ša ilkim* および *eqel šukūsim* を

保有地の「経営」上の種別を示す用語と理解すべきと考える。

V. 保有地再分配の手続き

保有地の種別を示すと考えられる用語 *eqel šibtim*, **eqlum ša ilkim*, *eqel šukūsim* に注目して新政権下の保有地体制のあり方を考察してきたが、本章ではこの保有地再分配の手続きに注目して保有地体制を再確認してみたい。

旧政権下で世襲化してしまった保有地 *eqel bit abim* の保有を追認する際、(資料1)、(資料2)で動詞 *bārum*「認承する」が用いられている。**eqlum ša ilkim* が給付される手続きを見ると、*bārum* という手続きの後には、(資料4)、(資料5)で確認できた *nadānum*「給付する」という手続きがあったことが AbB 4 99 に検証できる。

(資料6)

リーシュ・イラ (保有) のピンヌム市の耕地に関して、もしその耕地がドゥカクムの区画にあり、ベーリ・ワカルのものでして記載されていたのなら、認承しなさい (*birrāma*) ! その耕地を…、リーシュ・イラの兄弟であるシン・ウツェリに給付しなさい (*idnā*) ! そしてその報告をこちらに書き送りなさい ! (AbB 4 99:6-18: ハンムラビからシャマシュ・ハージル、シン・ムシャリム、彼らの部下宛の書簡)

この書簡はベーリ・ワカル の保有地として新たに登記簿に記載されたはずの耕地にクレームがついたことに対する指示であり、旧来の保有者リーシュ・イラの保有地と追認した上で (*bārum*)、新たにリーシュ・イラの兄弟であるシン・ウツェリに給付する (*nadānum*) ように命令する。

(資料6)ではリーシュ・イラの保有地と追認される耕地が何と呼ばれるかは明記されていないが、(資料1)、(資料2)で *eqel šibtim* として追認するために同じ手続きが、同じ動詞 (*bārum*) で表現されていることを考えれば、この手続き上の状態は *eqel šibtim*「保留地」と考えることができよう。さらに、(資料1)で示したように、旧政権下の保有地の登記簿が代替わり毎に更新されなかったことを考慮すれば、登記簿に保有者として記載されていたはずのベーリ・ワカルはおそらく旧政権下の過去の人物であろう。このベーリ・ワカル の保有地として記載されている耕地を現保有者であるリーシュ・イラの耕地としてまず追認する (*bārum*) という管理上の手続きがとられたのであろう。しかし、このリ

ーシュ・イラの保有地は彼自身ではなく、実際は彼の兄弟シン・ウツェリに給付されている (*nadānum*)。シン・ウツェリはハンムラビにより雇用されたのであろう。リーシュ・イラが *eqel šibtim* を再給付されなかったように、たとえ *eqel šibtim* の保有がある人物に追認されたとしても、最終的にはその人物に必ずしも給付されたわけではなかった。動詞 *bārum* という手続きを経て *eqel šibtim* として追認することは、必ずしも動詞 *nadānum* という手続きに自動的に移行するとは限らないのである。

次に(資料3)で **eqlum ša ilkim* を給付するために用いられた動詞 *nadānum*, *kānum* に注目して *eqel šibtim* が言及される以下の(資料7), (資料8)を検証すると、旧政権下の保有地 (*a.šā šuku*, *eqel bīt abim*) が、再び *eqel šibtim* として追認されたうえで、**eqlum ša ilkim* として給付 (*nadānum*)・認可 (*kānum*) されたことが検証できる。

(資料7)

ディンギル・マンスムと彼の兄弟達の(追認された) *eqel šibtim* のうち、アラル市の耕地2ブルとラハブム市の耕地4ブルをディンギル・マンスムと彼の兄弟達に給付しなさい (*idnā*)!そして残りの耕地をウブラビ市住民であるT職に給付しなさい (*idnā*)! (AbB 4 28:6-15:ハンムラビからシャマシュ・ハージル、シン・ムシャリム、彼らの部下宛の書簡)

ディンギル・マンスムと彼の兄弟達の保有地であったことが追認された *eqel šibtim* を彼ら自身とT職にシャマシュ・ハージルとその組織が分割して改めて給付することになったことが理解できる。

ここで注目したいのは、シャマシュ・ハージルが *eqel šibtim* を分割して給付する手続きで動詞 *nadānum* を用いたことである。*nadānum* で表現される手続きは、旧政権下の保有地を *eqel šibtim* と追認した上での **eqlum ša ilkim* としての給付を示すと考えたい。(資料2)で旧政権下の保有地を新政権下の *eqel šibtim* と追認したのであるから、ディンギル・マンスムと彼の兄弟達の *eqel šibtim* は旧政権下の保有地であったのだろう。したがって、ディンギル・マンスムと彼の兄弟達の保有地であるはずの *eqel šibtim* が彼ら自身とT職に分割して、給付されるのは、(資料4)とほぼ同理由、すなわち旧来の保有地が新たに彼らに課された「イルクム」義務に対応する保有地給付にあまると判断されたためであろう。また、新政権下で *eqel šibtim* としてたとえ一時的に追認され

たとしても、それは **eqlum ša ilkim* として給付されたことにはならなかったと考えられる。追認した *eqel šibtim* から **eqlum ša ilkim* として改めて給付する手続きで *nadānum* という動詞が用いられたと理解する。⁽²⁷⁾

(資料 8)

ウグラマルトゥ職のウラシュ・ムバリトが、ジブナトゥム市とエギキルム市との間にあり、イッディン・ナナヤがかつてイラ・カラドから奪った、家具職人のイッディン・ナナヤの *eqel šibtim* に、監視人達を配置した。ウラシュ・ムバリトに、イッディン・ナナヤの耕地のもとに配置した監視人達をどかせ、その耕地に近づかないように私は彼に厳命した。そして汝達は、ウラシュ・ムバリトがイッディン・ナナヤの耕地に置いた監視人達を立ち退かせなさい！その耕地を家具職人のイッディン・ナナヤのものとして認可しなさい (*kinnā*)！(AbB 4 36:6-30:ハンムラビからシャマシュ・ハージル、シン・ムシャリム、彼らの部下への書簡)

ウグラマルトゥ職のウラシュ・ムバリトは、家具職人職のイッディン・ナナヤの *eqel šibtim* に監視人を配置して、イッディン・ナナヤが *eqel šibtim* を保有することを妨害した。シャマシュ・ハージルとその組織は監視人を立ち退かせ、再びイッディン・ナナヤに *eqel šibtim* を認可すべく (*kānum*) 命令する。

イッディン・ナナヤが *eqel šibtim* を保有し続けることをウラシュ・ムバリトが妨害した理由はこの書簡からは不明であるが、この書簡の時点では(資料 2)の如く旧政権下の保有地であったことが追認されたと考えられるイッディン・ナナヤの *eqel šibtim* は、(資料 6)と同様に給付される。注目すべきは(資料 6)と異なり、給付する手続きで用いられる動詞が *nadānum* ではなく *kānum* であるということである。(資料 6)の動詞 *nadānum* ではなく動詞 *kānum* がどうして用いられたかは、この資料(資料 8)からだけではわからない。しかし(資料 3)で **eqlum ša ilkim* を給付する手続きとして動詞 *kānum* を用いていることを考慮すれば、少なくとも *eqel šibtim* を認可する場合に動詞 *kānum* の手続きが踏まれたといえる。

このように、「ラルサ地域」の王領地経営官僚のシャマシュ・ハージルとその組織は旧政権下の保有地を *bārum* という手続きによって新政権下の *eqel šibtim* として追認し、仮保有を認めた。そして彼らは仮保有を認めた *eqel šibtim* を *nadānum* あるいは *kānum* という手続きを経て **eqlum ša ilkim* として新

たに給付・認可したのである。したがって保有地再分配の手続きを検証することによっても、やはり *eqel šibtim* と、**eqlum ša ilkim* および *eqel šukūsim* との間に再分配に至るまでの手続きにおける異なる段階を見ることができる。

おわりに

保有地の管理上の手続き過程にしたがってラルサ書簡を再検討すると、「ラルサ地域」の王領地経営責任者であるシャマシュ・ハーシルとその組織は、旧政権下の保有地を *eqel šibtim* として追認し (*bārum*)、まずはその仮保有を認めて耕地の継続的な生産活動を維持する一方、暫時新体制の真髓である **eqlum ša ilkim* として新たに給付・認可していった (*nadānum*, *kānum*)。また *eqel šukūsim* は、**eqlum ša ilkim* とは別種の保有地として改めて給付された。⁽²⁸⁾ *eqel šibtim*, **eqlum ša ilkim*, *eqel šukūsim* は必ずしも保有地のある特定の性格を強調した用語ではなく、管理レベルの違いによって使い分けられたと解釈するのがハンムラビの保有地体制を考えるうえで重要であろう。⁽²⁹⁾ このように保有地の種別を示す用語を管理レベルによって使い分け、ハンムラビは旧政権の保有地体制を、**eqlum ša ilkim* を根幹にした保有地体制へ転換したのである。

今なおその研究が影響力を持つエリスのように王領地を義務の種別から見るのではなく、旧保有地体制から **eqlum ša ilkim* を根幹にした保有地体制への再編成という観点から、「ラルサ地域」の王領地を再検討する必要がある。

新政権下で整備された **eqlum ša ilkim* は従来の保有地と大きく異なる点がある。すでに川崎康司が指摘したように、それは **eqlum ša ilkim* 保有者と「イルクム」義務者の一本化である。旧政権では実際の耕地保有者と登記簿に記載されている保有者が同一ではない場合があるばかりでなく、耕地保有者と義務者も一本化していなかった。ハンムラビが **eqlum ša ilkim* 保有者と「イルクム」義務者を一本化させた背景には、初期王朝時代には存在したといわれる a. ša šuku 保有者と奉仕義務者の一体関係を復活させようとする意図があったに違いない。⁽³⁰⁾ **eqlum ša ilkim* 保有者と「イルクム」義務者の一本化によって **eqlum ša ilkim* からの奉仕義務者を掌握し、安定的に確保することが可能になった。そればかりでなく、ハンムラビ「法典」の農事関連法規で **eqlum ša ilkim* 保有者の権利・義務を規定することで、民間経済活動が活性化していた状況で

**eqlum ša ilkim* 所有者を保護し、王宮が **eqlum ša ilkim* を含めた耕地を管理する際の負担を軽減させることができた。ラルサ書簡に **eqlum ša ilkim* の耕作や収穫に関する言及が少ないのは、ハンムラビや「ラルサ地域」の王領地経営官僚にとって最早耕地の経営に直接関わる必要がなかったとともに、保有地体制における政権側の関心が主として **eqlum ša ilkim* に基づいた課役に置かれ、奉仕義務者を安定的に確保することが重視されたために違いない。

古バビロニア時代のイルクムについては未だ不明な点が多く、さまざまな研究が行われてきた。このこと自体がイルクムが数多くの問題を含んでいることを示す。ここでは「ラルサ地域」の保有地体制を論じたが、王領地経営の全体像解明に向けて経営モデルの更なる詳細を今後提示していく方針である。

注

- (1) 本稿は修士論文「ハンムラビ占領下における『ラルサ地域』の耕地経営」(早稲田大学院文学研究科修士課程 2004)の一部を加筆・訂正したものである。略号は特に記さない限り、*Chicago Assyrian Dictionary*, No. 14 R (1999) に従う。

参考として、以下に修士論文で提示した「ラルサ地域」の王領地経営全体のモデルを図示する。

- (2) 占領後のラルサ地域を指す名称については、ストールの研究がある。Cf. M. Stol, *Studies in Old Babylonian History*, Leiden, 1976, 63-72.

- (3) **eqlum ša ilkim* は実際の文書では確認されず、(資料3)のような個別的な名称、もしくは「耕地」と記された。**eqlum ša ilkim* に該当するであろう表現はハンムラビ「法典」38条にある (*ina eqlim kirtm u bitim ša ilkišu*)。なお、名称の前に記す*マークは、その名称が実際の文書で確認されていないことを示す。
- (4) 主な先行研究として、M. de J. Ellis, *Agriculture and the State in Ancient Mesopotamia* (Occasional Publication of the Babylonian Fund 1), Philadelphia, 1976; W. F. Leemans, “Die Arten der Zurverfügungstellung von Boden für landwirtschaftliche Zwecke in der altbabylonischen Zeit,” *WdO* 8 (1976), 241-253; I. M. Diakonoff, “Муškênum и ПОВИННОСТНОЕ ЗЕМЛЕВЛАДЕНИЕ НА ЦАРСКОЙ ЗЕМЛЕ ПРИ НАММУРАБИ” *Eos* 8/I, 1956, 37-62; I. M. Diakonoff, “The Structure of Near Eastern Society before the Middle of the 2nd Millenium B. C.,” *Oikumene* 2, Budapest, 1982, 7-100; D. Charpin, “Le rôle économique du palais en Babylonie sous Hammurabi et ses successeurs,” in E. Lévy (ed.), *Le système palatial en Orient, en Grèce et à Rome*, Leiden, 1987, 111-126; J. Renger, “Des Privateigentum an der Feldflur in der altbabylonischen Zeit” in B. Brentjes, (ed.), *Das Grundeigentum in Mesopotamien*, Berlin, 1988, 49-67 が挙げられる。エリスの分類が多少の批判があるにせよ、現在一般的に受け入れられている。近年出版されたハンムラビに関する2冊の研究書 (D. Charpin, *Hammu-rabi de Babylone*, Paris, 2003; M. Van de Mieroop, *King Hammurabi of Babylon*, London, 2004) はシャルバンが自らの王領地のモデル、ファン・デ・ミアロープがエリスの王領地のモデルを踏襲する。
- (5) 前田徹「エミに於ける〈クルを定められた人〉について——クル地給付、大麦支給、夫役との関連の再検討——」『史朋』5, 1976, 30.
- (6) K. Maekawa, “The Agricultural Texts of Ur III Lagash of the British Museum (IV)” *Zinbun* 21, 1986, 100.
- (7) 前川和也「シュメール・ウル第三王朝の属州ギルス経営」中村賢二郎編『国家——理念と制度——』京都大学人文科学研究所, 1989, 502-503.
- (8) Cf. M. Van de Mieroop, *Society and Enterprise in Old Babylonian Ur* (Berliner Beiträge zum vorderen Orient 12), Berlin 1992.
- (9) Cf. M. J. A. Horsnell, *The Year-Names of the First Dynasty of Babylon* vol. 2: *The Year-Names Reconstructed and Critically Annotated in Light of their Exemplars*, McMaster, 1999 147.
- (10) **eqel bīt abim* が言及されるラルサ書簡は AbB 4 4 : 16 : 24 : 33 : 40 : 51 : 54 : 64 : 118 : Goetze, *JCS* 17, No. 517 である。
- (11) Ellis, *Agriculture...*, 23.
- (12) ハンムラビ時代のイルクム制度と同様のシステムがリム・シン時代に存在した可能性はある。Cf. M. Van de Mieroop “The Reign of Rim-Šin,” *RA* 87 (1993), 47-63.
- (13) Diakonoff, *Oikumene* 2, 27-36.

- (14) Cf. I. M. Diakonoff, “Extended Families in Old Babylonian Ur” ZA 75, (1985), 47-65.
- (15) *ša umāši* “Ringer mit K(lammerhaken)” (AHw, 1412b *umāšu* (m) (2)). 詳細は不明だが、鉤のような道具を持って儀式に参加すると推定される。
- (16) *sukkuku* “deaf, obtuse” (CAD S, 362b-363b). CAD ではラルサ書簡の全ての *sukkukum* (AbB 2 12; 4 28:40) をニックネームとするが、ここでは職名と理解する。
- (17) *eqel šibtim* と *šbtum* に本質的に相違がないことは、AbB 1 59 で言い換えに過ぎないことから確認できる。また語義においても齟齬はないであろう。*eqel šibtim* が言及されるラルサ書簡は AbB 1 59; 4 28; 36; 94; 120 であり、*šibtum* は AbB 1 59; 2 60; 4 40; 43; 89; 123; 138; 8 3。
- (18) 耕地保有権の裁判のために神殿所蔵の「神の武器」を耕地に持っていき、紛争当事者双方に宣誓させることがあった。Cf. R. Harris, “The Journey of the Divine Weapon” AS 16 (1965), 217-224.
- (19) 彼の職能については、チェンの研究があるが、彼の見解にはまだ検討の余地がある。Cf. D. Zheng, “On the Role of Lu-Ninurta in Hammurapi’s administrative Structure”, JAC 11 (1996), 111-122.
- (20) シヤマシュ・ハーシルが「イルクム」義務を果たしたと解釈されてきた。例えばエリスは労働奉仕である「イルクム」義務を拡大解釈し、「国家の耕地行政に関連する行為も含まれた」(Ellis, 1976, 26 n. 79) とする。彼女の解釈は、(資料3)の “*ilkam alākum*” の解釈に依拠する。通常この表現は「『イルクム』義務を果たす」と解釈されるが、(資料3)に適用しても「汝が果たした『イルクム』義務の書類」となり、意味をなさない。ファン・デ・ミアロープが「『イルクム』の書類を記録する」との解釈を示したが (Van de Mieroop, *King Hammurabi of Babylon*, 90), シヤマシュ・ハーシルが保有地の経営に積極的に介入することを考慮すれば、単に記録するばかりでなく経営する意味も含んだであろう。
- (21) *eqel biltim* は従来 **eqlum ša ilkim* と区別されてきたが、資料3によれば **eqlum ša ilkim* であり、再検討の余地はあろう。
- (22) 川崎康司「ハンムラビによるバビロニア統合支配と経済政策の背景：『イルクム』体制の導入と『法典』上の新機軸」小倉欣一（編）『ヨーロッパの分化と統合：国家・民族・社会の史的考察』太陽出版，2004，13-30.
- (23) *eqel šukūsim* が言及されているラルサ書簡は AbB 1 59; 4 2; 3; 4; 14; 55; 57; 67; 69; 71; 72; 108; 110; 111; 114; 115; 116; 117; 118; 121; 133; 9 193; 195; 196; 13 4 である。
- (24) 新体制における *eqel šukūsim* がはたしてどのようなタイプの保有地を指すのか、この引用例だけでは議論できない。新体制における *eqel šukūsim* と、イルクム義務を前提としなかった旧政権の a.šā šuku との違いをより明確に定義できればよいのであ

るが、とりあえずは **eqlum ša ilkim* が「イルクム」義務を伴う耕地であることを考慮して、対照的に *eql šukūsim* は「イルクム」義務を伴わない耕地と考えたい。*eql šukūsim* は保有形態として **eqlum ša ilkim* と別の種別と考えて間違いなく、その性格については別稿で論じたい。

- (25) 例えば AbB 4 93 では収穫物たる大麦を耕地保有者へシャマシュ・ハージルが渡していないことがハンムラビに訴えられている。
- (26) 川崎康司『歴史学の現在——古代オリエント——』山川出版社、2000、58-59 参照。
- (27) AbB 1 59 でも大工達の *eql šibtim* から耕地を別の人物へ **eqlum ša ilkim* として給付する手続きで動詞 *nadānum* が用いられている。
- (28) レーマンスは **eqlum ša ilkim* と *eql šukūsim* を別種の耕地と捉えた。彼は賦役を軍役と非軍役に分けて、前者を軍役、後者を非軍役用耕地としたが、軍役と非軍役との区別を裏付ける資料はない。Cf. Leemans, *WdO* 8, 244-246.
- (29) エリスによると、*eql šibtim* は耕地が「保有」されていること、*eql šukūsim* は耕地が保有者の「扶養」のために給付されたことを強調する場合に用いられた用語であった (Ellis, 1976, 19.)。また **eqlum ša ilkim* はシャルパンによれば、「(イルクム) 義務」を伴う耕地であることを強調する場合に用いられた用語であった (Charpin, “Le rôle économique...”, 117 n. 19.)。
- (30) 第48回シュメール研究会 (2005年5月8日) の筆者の発表「ハンムラビ占領の『ラルサ地域』における王領地経営：保有地を中心にして」への前川和也、前田徹、川崎康司の三氏の御教示による。